

## 下田歌子研究所シンポジウム 「学祖研究の現在」

二〇一五年十一月二十一日（土）、下田歌子研究所シンポジウム「学祖研究の現在」が、渋谷キャンパス創立百二十周年記念館四〇三教室で開催された。

はじめに田島真実践女子大学学長・短期大学部学長から開会の挨拶があり、昨今の大学改革の流れの中、学祖研究はますます重要になってきており、本学でもグラントデザイン策定委員会を設けて建学の精神の見直しをしていることもあって、本シンポジウムに大きな期待を寄せていることが述べられた。この後、湯浅茂雄氏（下田歌子研究所所長）、竹村牧男氏（東洋大学学長）、勢力尚雅氏（日本大学教授）、片桐芳雄氏（日本女子大学名誉教授）の各パネリストからの提題があり、コーディネーターを伊藤がつ

とめた。

主催校として最初に登壇した湯浅氏は、「女性が社会を変える、世界を変える」というテーマで、下田歌子の伝記を親しみやすく漫画化して出版した『ぎらりうたこ』の学祖紹介の事業などを紹介しつつ、下田歌子の教育者、歌人、国文・国語学者、家政学者、社会福祉事業家としてのマルチな活躍についてふれ、たとえば下田が故郷を出る際に詠った「綾錦着て帰らずば三国山またふたたびは越えじとぞ思ふ」という歌の精神などに実践女子学園の原点が見られること、また、「帝国婦人協会設立主意書」の「揺籃を揺るがす手は以て能く、天下を動かすことを得べし」の意図を汲んで、今年度から「女性が社会を変える、世界を変える」と

という言葉を建学の理念として発信することになったということなどについて述べた。さらに、下田が実践女子学園のみならず、世界の女子教育がよりよいものとなることを願っていた精神を継承すべく、下田歌子研究所がどのような取り組みを進めているかを研究所の事業計画を具体的に示しながら紹介した。

次に竹村氏は「東洋大学における井上円了研究の現状」という題で、私立哲学館大学を創りながら、全国を回って七千回以上と言われる講演活動を行った井上の人生の紹介から、彼が三度の世界旅行で見聞したことを通して、教育による人物の養成ということを重視するに至り、当時の日本では一般的に教育の基礎が経済学や法学といった実学に置かれていたのに対し、哲学をベースにした教育を展開するという、当時としては画期的な哲学館の教育方針を作り上げていった経緯を説明した。そしてこのような井上の考えから、東洋大学は教育理念として、「諸学の基礎は哲学にあり」「知徳兼全」「独立自活」を掲げているが、これらは今日の高等教育界で重視されている「何を知らるかよりも、何ができるようになるか」ということにも合致し、その意味で井上の教育理念は、まさに今日の教育の潮流を先取りしたものと言えること、そして現在進行中のカリキュラム再編でも、基礎教養教育科目はむしろ、専門科目にもそれに関わる哲学科目を置くことで、常識や流行にとらわれずに深く考える訓練ができるような取り組みを進

めていることを紹介した。さらには、法人立の「井上円了研究センター」を設置し、それを母体に「国際井上円了学会」を立ち上げ、国際的連携の中で井上研究を進めていることなど、研究体制の現状についても報告した。

三人目の勢力氏は、「山田顕義の「人間の条件」——日本大学の建学の精神のかたちと変遷をたずねて」というテーマで、日本大学の建学の精神として挙げられている「日本精神」と「個の尊重」という相容れないようにも見える二つの理念、そして新教育理念として「自主創造」という言葉を、学祖・山田顕義の人生や言葉から整理し、理解しなおすことであらためて位置づけられることを論じた。山田は明治の司法改革に取り組んだ中心人物であるが、その際に山田が、西洋のものを右から左に持つてくるのは、日本人の風俗・文化や人情の中に根付いていかない、よって日本人の「数千年の習慣風俗」をあらためて観察し、日本人に合った私たちの憲法を制定・運用しなければならぬと考えたこと、また、国民に憲法を一方的に押し付けるのではなく、時間をかけてきちんとその理を理解させようとしていたことなどに、「日本精神」と「個の尊重」とを並び立つものとして理解できるところを指摘した。そしてまた、こうした新たな生き方を試行錯誤し続けるということこそが、山田の考えた「人間が万物の最たるものである条件」であって、その背景には一八四四年に萩の藩士の家に生

まれ、吉田松陰の松下村塾に学び、また大村益次郎から洋式兵学を学ぶなど、激動の時代を生きた山田の経歴があり、そこから「自主創造」という理念を位置づけることも可能であろうと論じた。

最後に登壇した片桐氏は、「日本女子大学と創立者成瀬仁蔵」という題で、日本女子大学で現在も行われている創立者・成瀬を徳ぶ年間行事や、成瀬・日本女子大学研究に対する学内の研究支援体制（研究助成・出版助成など）について紹介した後、このように成瀬を顕彰している学内においても、崇拜者と嫌悪者と無関心層があり、それをまとめていくことの難しさを述べた。しかし、一般的に言われるような「国際化」などの言葉ではその大学にふさわしい理念を打ち出すことはできず、やはり創立者の言葉に立ち戻らざるを得ないことを指摘し、日本女子大学を含め、明治時代に創られた女子大学のほとんどが「良妻賢母」を育てるとしていたが、成瀬は「女子を先ず人として、第二に婦人として、第三に国民として、教育する」（『女子教育』）と言って、女性は一生涯においてその役割・あり方がいろいろに変化していくのであるから、まずは人としての教育を考えることが大事であると述べており、そうしてみれば、百年後の今でも活かすことのできるこのような考えを現在にどのように受け継いでいくかを学生や社会に対して説明できるようにすることが、学祖研究の真の目的であろうと論じた。

以上の各提題を受けて、後半のパネルディスカッションでは、四つの論点についてあらためて各氏の意見をうかがった。一つ目は、学祖や建学の精神を研究する際に、具体的にどのような方法を探るのがふさわしいと考えられるか、また、現代的視点からの批評的研究と、当時の時代背景をふまえての研究とでは当然さまざまな違いが出てくるが、それらをどう繋ぎながら考えるかという点、二つ目は、さまざまな学祖理解や評価が学内にある場合に、大学として統一見解を出していくべきかという点、三つ目は、自校教育を進めるとなると学内の協力やコンセンサスが必要であるが、その際にどのような注意・配慮をすべきかという点、四つ目は、そもそも官学とは異なる教育として始まった私学教育を、今後どのように進展させていくべきかという点である。湯浅氏は、下田が目指したものをカリキュラムに落とし込む段階にはまだ至っていないが、学生が女性の生き方のモデルとしての下田に学べるようなものを考えたい旨の構想が述べられ、竹村氏は、時代背景もあつて井上にも光と影の両面があるが、その思想の中から、未来を先取りするような、あるいは普通の真理とも言えるような重要な点を抽出していき、現代に活かしていくために、時に学祖の言葉の現代的な読み替えをしながら、大学としての統一見解を出していくことも必要であろうと論じた。勢力氏は、「自主創造」という理念を活かすためには、学祖の残した言葉やその時代の精神

を、学内の統一見解として無難なかたちやイデオロギーにまとめあげるのではなく、教員や学生が自分自身で考える試行錯誤こそが重要なのではないかと提案し、片桐氏は、創立者を客観的に研究したその上にこそその顕彰もあるべきで、根拠のない神格化はあつてはならない、そのためにも、成瀬仁蔵を個人としてよりも、その時代の中において研究するということを現在進めていると述べた。

時間の制約もあり、十分な議論を尽くすことはできなかったが、現在多くの私立大学が学祖や建学の精神を見直し、立ち返ろうとしているその方法や問題点などをあらためて考えてみようというおそらく初めての試みであったということ、また、来場者からの反響の大きさを考えると、本シンポジウムの意義は小さくないものであったと思われる。下田歌子研究所では、今回の議論で浮き彫りになった課題を、今後さらに継続的に考えていく場を設けていきたいと考えている。

(伊藤由希子／実践女子学園下田歌子研究所主任研究員)



竹村 牧男 氏



湯浅 茂雄 氏



片桐 芳雄 氏



勢力 尚雅 氏